

追悼

新しいモラル・サイエンスへの挑戦

水野 治太郎

故永安幸正教授の急逝は、多くの人々に衝撃を与えました。ことに私には忘れられない思い出となりました。年齢は私のほうが三つ年上でしたが、同じ社会科学の出身であったために、共通する問題意識が二人の間にはいつもあって、話題には事欠かなかったと記憶しています。晩年には、氏が中心となって執筆し、懇請されて私が加筆した『総合人間学モラロジー概論』をめぐる往復書簡ならぬメモ書きの数量は、ダンボール箱五つくらいあったと思います。

永安氏と最初に出会ったのは、財団法人モラロジー研究所研究部（今日の道徳科学研究センター）主催の研究会に氏が出席したことが縁の始まりでした。そのころは、高崎経済大学に勤務されていました。私がモラロジー学生研究会を育成する立場にあったことをよく知っており、すでにどこかの会場で、会っていたというのです。それが機縁となり、当時のモラロジー研究部に非常勤の연구원として席をおくことになりました。それは三〇数年前のことだと思います。

その後は、私が先に海外연구원として米国に滞在し、氏はロンドン大学に席をおくことになり、その途

中、わざわざ足を伸ばして自宅を訪問してくれました。

二人に共通する問題意識が多数ありましたが、その一つをここで紹介することで、追悼の意を表したいと思えます。

それは一言でいえば、廣池千九郎のモラロジー構想につよい影響を与えたものは何かという問いです。このテーマは、モラロジーの現代化に取り組む者としては、大きな関心事でした。廣池千九郎自身は、「道徳実行の効果の実証」に焦点化して、一九世紀のダーウィニズム、それも優生学と結んだ進化論的倫理学や人類学・社会学、さらには実証主義的な実験心理学・生理学等からの影響を論じております。そしてその立場から、フランシス・ウェーランドのモラル・サイエンスはまだ自然科学の発展以前の単なる教訓にすぎないと批判しています。

しかしモラル・サイエンスの語源は、明らかに一八世紀の英国、それもスコットランドのモラル・サイエンスからの影響を感じさせます。たとえば、廣池の西欧近代思想、それもアダム・スミス等の経済学への批判とか、フランスのオーギュスト・コントの利他主義への共感等は、逆にいえば、そのことを証明しているようにもみえます。

かつて顧問の下程勇吉先生は、廣池のモラロジー構想を独自の人間学として理解すべきだと発言され、著書も著されました。しかし、私はそうだとしても、廣池自身の学問を継承発展させるためにも、学問的・方法論的・思想的源流を明らかにすることの必要性を提案してきました。そして、その源流は明らかに、アダム・スミス等のモラル・サイエンスに原型を求める考え方に固執しました。これに対して、永安教授は、つよい関心を寄せ、同調意見をもっていました。

はじめて氏が、研究員として発表した内容の中に、スミスのセルフ・インタレストの解釈にふれることがあって、聴衆として参加していた会員との間に、激論が交わされたことがあります。スミスの経済学が「自己利益の経済学」だとの見解に対して、彼が加えた反撃は、当時すでに世界中の経済学者によって容認されはじめた「アダム・スミス問題」(『道徳感情論』と『国富論』の間の違和感をめぐる解釈問題)を背景にしたものです。もちろん氏は、その会員が、スミスの経済学を単純に「自己利益の経済学」と決め付けたことに反論したものでした。詳細はここでは避けませんが、現代のスミス解釈は、セルフ・インタレストは、自己利益とか欲望の意味ではなく、社会への関心、あるいは社会と自分をつなぐもの、倫理的な意味での個人主義・自己実現に近いものであると理解されています。したがって、モラル・サイエンスは、人間の自然の性向である他者への関心・同感(社会性)に始まる人間行動の基本原則を探求し、さらには国家のあり方・社会の仕組みのあり方にまで言及する学問といえるでしょう。根幹にあるのはスミスの『道徳感情論』なのだという事です。そこにはキリスト教的な自然法論が控えていたといえます。ということは、『国富論』は彼のモラル・サイエンスの一つの題目でしかなく、その副産物だったこととなります。ちょうど廣池千九郎が最高道徳となづけた自然法のうえに道徳経済学・道徳政治学・道徳教育学構想をもっていたように、モラル・サイエンス論者は、基礎原理のうえにその応用分野として社会諸科学を位置づけたと理解できるように考えられます。

また廣池千九郎は、モラロジーの源流を一九世紀の社会ダーウィニズムとの関連性だけを指摘しているのみで、アダム・スミスとは無縁のものという理解に基づいていたのですが、それは当時の学問的常識の誤解であって、社会ダーウィニズムはダーウィンに始まるのではなく、むしろ一八世紀の社会思潮にひろくみら

れ、その後の時代思潮を決定付けた「進歩の観念」に影響されたものだとする考え方が現代の学問的理解として正しいように思います。

かつてモラロジー研究部で一時指導された難波田春夫先生は、永安氏の恩師でもありましたが、永安氏は恩師の「近代の終焉」の大テーマを継承するなかで、モラロジーのなかにあると難波田先生が指摘された「進歩の観念」あるいは「モア・エンド・モア」をどのように解釈し直し、位置づけ発展させるかを苦慮していたといえるでしょう。

永安氏は、本来、社会システム論、それも自然システムを基盤に見据えた理論を展開していました。モラロジーとの出会いによって、次第にその自然システム・社会システム論が、いわば自然の法則あるいは摂理として人間を支配する性格のものと解釈されていたように記憶していますが、あるときから、それも病を得た頃からか、彼の原理展開が、非常に人間味を担った柔らかな内容を帯びるものに変質してきたと感じています。あるとき突然、私が長い間取り組んできたケア理論に言及し、病気をしはじめてケアの意味が判ったとか、モラロジーの理論として位置づけるべきだとか、なぜもつと早くできなかつたとか、指摘されるようになりました。突然の変貌に私のほうが驚いてしまいました。

これらの議論は、永安氏の強力なイニシアティブの下に作成された『総合人間学モラロジー概論』なるテキストに集約されているといえるでしょう。西欧近代思想・近代主義の欠点をどう乗り越えるかの主要問題にはこのテキストで解答を与えています。個人主義・自我意識の思潮に対して、個を柔らかに受動的な存在であることから発想すること、個をこえる自然や社会・文明の恵みを受け取りながら、全体として高い質の文明を発展させることが、目標であったのです。彼こそ真のモラロジアンであったと痛感しています。理論

のよき好敵手を喪って、私は体の中から大きなエネルギーを放出されたように感じています。

実は本年四月発行の拙著『経国済民の学——日本のモラル・サイエンス研究ノート』（麗澤大学出版会）のあとがきに、テキストをめぐる交流の一端を書きました。もう少しこの拙著が早くできていたら、氏からの批評が聞けたと思うと、残念な思いもありますが、その遅れた理由は、他ならぬ『モラロジー概論』への加筆のためであったことを思うとき、これも仕方のないことかと諦めもつきます。このうちは、後輩諸氏が、氏の研究路線を継いでゆくことを願わざるをえません。氏の魂は、我々の身近に生きて見守り続けていることでしょう。氏の一生の運命の分かれ目に、私が縁を運んだことを思うと、有難くも、また申し訳なくも思う今日このごろです。

通常なら、最後に「御霊よ、とこしえに安らかにお眠りください」と結ぶところですが、あえて、私は、今後の団体の発展のために、「あの世からたえず警醒し給え！」と結びたいと考えます。長くて短いお付き合いを感謝申し上げます。